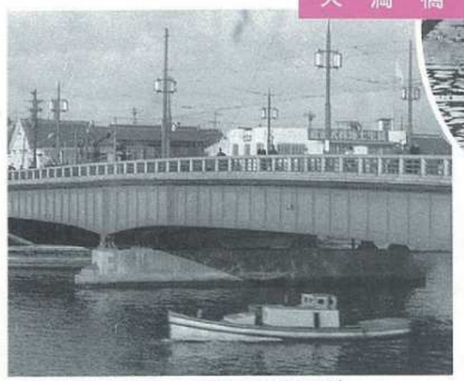
第2章

橋の歴史　八百八橋――いまむかし

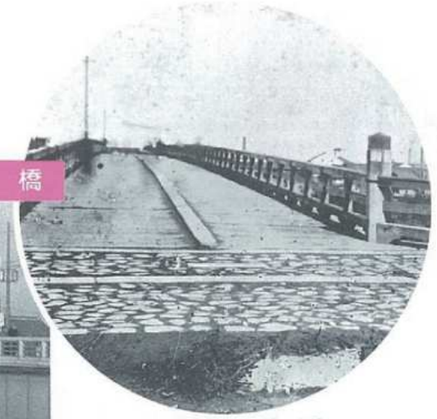
大阪は、淀川と大和川の河口部に発達してきたまち。その街並みは、縦横に走る堀や川によって形成されており、昔から数多くの橋が架けられてきた。
「浪華八百八橋」は、橋が市街地の発展に大きく寄与してきたことを言いあらわしたものであろう。
今日でも、「淀屋橋」、「四つ橋」、「桜橋」などのように、地下鉄の駅名や、主要な地点名に橋の名が多く使われており、橋が大阪のまちと密接な関係にあることを物語っている。

▼「浪速天満祭」五雲亭貞秀画（サントリー美術館蔵）右下隅、難波橋。左、天神橋。天神橋の向こうには天満橋も見える。

天満橋

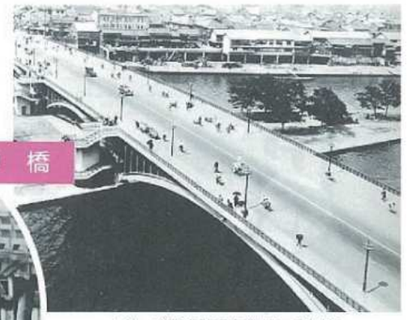


▲第一次都市計画事業によって架けられた（昭和10年）。現在はこの橋の上にさらに橋が架けられ、「天満重ね橋」と呼ばれている。



▲明治18年以前の木橋。

天神橋



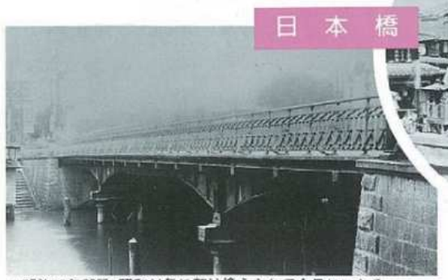
▲第一次都市計画事業によって架けられた（昭和9年）。

▲明治18年以前の木橋。

◀明治初期の頃。（当初、新大橋と呼ばれた）「浪花百景之内、川口の新大橋」二代長谷川貞信画（神戸市立博物館蔵）

▲明治初期の木橋。

日本橋



▲明治45年架設。昭和44年に架け換えられて今日にいたる。

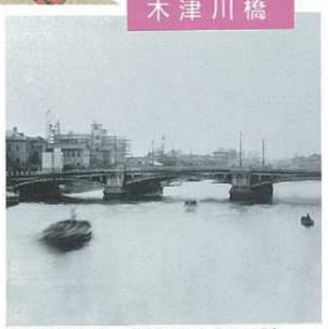
▲明治時代の木橋。

栴檀木橋

▲第一次都市計画事業によって架けられた（昭和10年）。昭和60年の架換により今日の姿となる。

▲明治時代の木橋。

木津川橋



▲市電敷設に伴って架けられた（大正2年）。現在の橋は昭和40年完成。

難波橋

▲市電事業によって架けられた（大正4年）。昭和50年に改修。

古代・中世の橋

「猪甘津に橋為す即ちその處を號けて小橋と曰ふ」

これは、書物に登場する最古の橋の記述といわれ、「日本書紀」仁徳十四年の条に出てくる。猪甘津は、現在の生野区付近と想定される。その周辺には、「猪飼野」・「小橋」という地名が残り、猪甘津の橋跡とも伝えられる「つるのはし跡」の石碑も建てられている。

難波は、古代から交通の要衝であった。飛鳥時代には、大陸交流の拠点となり、難波、大和を中心とする官道の整備が進められた。このとき、長柄豊碕宮への通路として、長柄橋が架けられたという伝承があるが、真偽のほどはわからない。

奈良時代に入ると、官道の発達とともに生活圏の拡大も図られ、僧侶を中心とした土木事業が盛んになる。ひとつには、大陸から新しい土木技術が仏教とともに伝来したことが、大きな刺激となったのであろう。このとき長柄、堀江などの橋が、僧行基により架けられたと伝えられている。

平安時代の初めは、比較的国力も充実した時期であり、朝廷から各地に造橋使が派遣され、多くの橋が架けられた。「日本後紀」に記されている長柄橋もそのひとつである。

弘仁3年(812)に架けられた長柄橋は、大阪の橋のなかで、架設年次の特定できる最古の橋といわれる。しかし、約40年後には、橋はすでになく、渡しがその代用となって再び架設されなかったようである。平安時代も後期になると、中央政府の権力も相対的に下降し、税収の低下や国内の政情不安もあって、架橋のみならず、橋の維持管理もままならない状態であったのであろう。

鎌倉時代の「源平盛衰記」によると、遠藤盛遠、のちの文覚が渡辺橋の橋供養の奉行を勤めた下りがある。また、「百錬抄」にも貞永元年(1232)の橋供養の記事が載っており、鎌倉期には渡辺橋が存在していたことがうかがえる。

かつて神崎、蟹島の地は、京都から西国への中継点にあたり、人の往来が盛んで、遊里としても栄えた。この地に伝わる「ゆりあげ橋」の伝説は、繁栄の蔭で、苦界に身を沈めていった遊女たちの存在を思い起こさせる。

中世はまた、戦乱の時代でもあった。「太平記」には、渡辺橋・神崎橋での争いが登場する。いずれも、街道の要衝にある橋をめぐっての戦いで、戦略のために橋の一部が取り壊されたりした。戦国期には、政情の不安に加えて、経済上、戦略上の理由から、架橋はあまり進まなかったのではないかと考えられる。

▲「つるのはし跡」碑（生野区桃谷三丁目）

▲ 猪飼野新橋　昭和62年完成。
高欄には日本書紀の一節を配し、「猪甘津」の橋が顕彰されている。

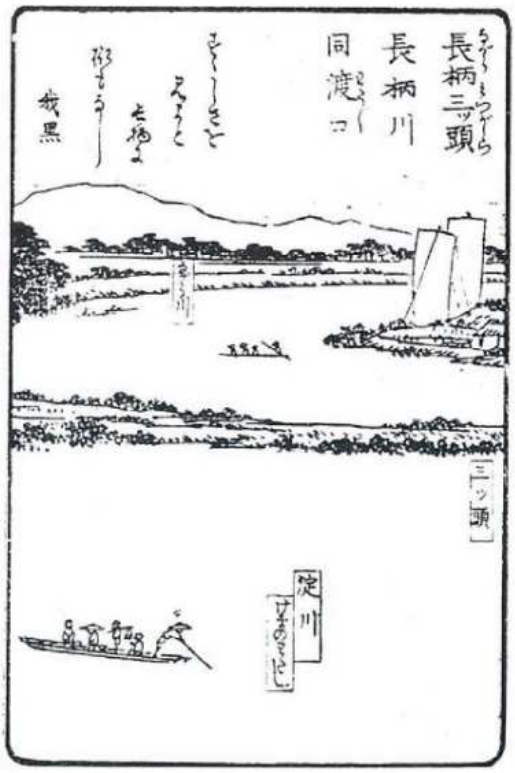
▲「遊女塚由来」碑　（尼崎市神崎町）
鎌倉時代、入水した遊女が橋のたもとに揺りあげられ、そこに葬られたという。

▲ **長柄橋 北詰東側の親柱裏面に刻まれた和歌**

弘仁3年(812)以後再び架けられることのなかった長柄橋ではあるが、歌枕としてその名を後世に伝えた。なかでも、その名をひろめたのが次の2首である。

よのなかに ふりぬるものは つのくにの
ながらのはしと われとなりけり
(詠人不知)

なにはなる ながらのはしも つくるなり
いまはわがみを なににたとへむ
(古今集 伊勢)



▲ **長柄三頭** 「淀川両岸一覧」より(淀川資料館蔵)

伝説の橋・長柄橋は、明治後期までの長い間、世に現われることなく、渡しによって両岸が結ばれていた。

◀ **長柄人柱伝説の碑**(淀川区東三国一丁目)

「長柄の人柱」という悲しい物語が語り継がれてきた。長柄橋の工事は人柱がなくては成しえない状態であった。土地の長者厳氏は「袴に継ぎのある人を人柱にすればうまくいくだろう」と提案したが、不幸にも自分の袴に継ぎがあったため、人柱として河底に沈められたという。

物言わじ 父は長柄の 橋柱
鳴かずば 雉子も 射られざらまし

▲ **先々代の長柄橋** 明治42年完成

新淀川開削直後、現在の長柄橋の付近にポニートラスの橋が架けられ、「長柄橋」の名が付けられた。

▼ **先代の長柄橋** 昭和11年完成

大阪府の十大放射道路事業によって架け換えられた。

アラカルト

擬宝珠の拓本(大阪城天守閣蔵)

■大坂橋

大正14年、東横堀川の浚渫中に、末吉橋と九之助橋の間の川底から、「大坂橋天正拾三年」(1585)の銘を持つ立派な擬宝珠(高さ60cm×外径35cm、重さ15kg)がみつかった。「大坂橋」に関する記録はどの文献にもなく、そのため橋の所在について多くの議論を巻き起こした。しかし、大阪城天守閣に保存されていたはずの擬宝珠は、終戦の混乱の中で再び姿を消し、現在では写真と拓本が残るだけで、橋の所在と同様に幻の擬宝珠となってしまった。